

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月9日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02372

研究課題名(和文)シェイクスピア演劇とエリザベス朝・ジェームズ朝の説教との比較文献学研究

研究課題名(英文)Shakespearean drama and its Contemporary Sermons

研究代表者

鶴田 学 (Tsuruta, Manabu)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：60352225

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：研究活動の当初はシェイクスピア演劇と当時の説教との関係を文献学的に解明することを目指した。しかしながら、説教から派生した修辞学への関心へと研究の焦点が移り、結果として平成27年度と平成28年度には『ハムレット』などの劇における修辞学に関する口頭発表を行い、論文を執筆した。特筆すべきは、イギリスの伝統ある学術誌、Notes & Queries 誌に2年連続で論文を掲載できたことである。研究活動の後半においては、当初の目的であった演劇と説教の間の相互言及の関係性を足掛かりに『あらし』や『ヴェニス商人』における説教の影響を論じ、それぞれ平成29年度と平成30年度に口頭発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、シェイクスピア劇作品における解釈の難しい部分に光をあて、当時の修辞学や説教との関係から、これまでに提示されることがなかった新たな解釈(あるいは定説を補完する別の説)を国際的に評価の高い学術誌において示したことで学術上意義のあるものとなった。また、共著書として出版された『甦るシェイクスピア』においては、Notes & Queries誌に発表した英語論文を敷衍し、日本国内の読書子にも理解可能な言葉で清新な作品論を世に問うた。

研究成果の概要(英文)：At the starting point of this study, it aimed to clarify the relationship between Shakespearean drama and its contemporary sermons by combining bibliographical methods and theoretical assumptions about Shakespeare's time and culture. However, the focus of the study gradually shifted into the use of rhetorical figures in the plays of Shakespeare, and several important findings were made concerning textual interpretations of such major Shakespearean works as Hamlet, Julius Caesar, and Coriolanus. They appeared on Notes & Queries in 2015 and 2016 consecutively. Then, in 2017 and 2018, the focus of the study turned again to Shakespearean drama and sermons, and a presentation was made on the relationship between Jacobean court-sermons and The Tempest in 2017 and another on Elizabethan sermons on merchant adventurers and The Merchant of Venice in 2019.

研究分野：シェイクスピア

キーワード：演劇 説教 シェイクスピア 修辞学

1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀においてシェイクスピア研究は二つの歴史主義を経験した。一つは(今や)旧歴史主義と呼ばれることとなった19世紀的実証主義の影響を色濃く引き摺った歴史研究を基盤とするアプローチであり、その研究姿勢は20世紀後半に台頭した唯物論的歴史主義(アメリカの新歴史主義、イギリスの文化唯物論)によって激しい批判に曝された。しかしながら、この一見相反する二つの歴史主義は、エリザベス朝演劇の世俗性を殊のほか強調した点において一致している。即ち、16世紀後半に相次いでロンドンのシティ近郊に展開した公衆劇場に居を構えたプロの演劇集団は、中世的なパラダイムの教会演劇から脱して、初期資本主義経済に順応した商業ベースによる演劇を上演した、という筋書きである。新・旧の歴史主義に影響されたシェイクスピア研究において、「聖から俗へ」という転換が二項対立的なイメージで理解されたとしても決して不思議ではない。20世紀後半のシェイクスピア研究の流れを大きく変えた新歴史主義や文化唯物論の研究は、緻密な史料の読み直しを通してシェイクスピア学における従来の定説を書き換えてきたが、そうした歴史主義や唯物論といった批評理論の考察の射程から漏れたものもある。その一つが宗教から見直すシェイクスピア演劇であり、21世紀初頭のシェイクスピア研究において「宗教への回帰」というスローガンが唱えられたのも理にかなったことである。現在、宗教言説の影響をまったく考慮せずにシェイクスピア演劇を解釈することは難しくなっているとさえ言えるであろう。本研究は、歴史から軌道修正して宗教へ、という近年のシェイクスピア研究の流れに沿う形で始まった。

(2) 前世紀からの伝統を引き継ぐ従来のシェイクスピア研究においては、公衆劇場が置かれたロンドン市郊外の世俗世界とピューリタンのイデオロギーが支配したとされるロンドン市内で発信される説教とは切り離されて考えられてきた。しかしながら、シェイクスピア演劇、聖書、説教の間には細かな相互言及によって結びついた、言葉のネットワークが存在する。また、書籍という形となって流通した演劇や説教は、同じような印刷屋によって印刷され、聖ポール寺院の庭に軒を連ねた書店の棚で並んで販売されていた。印刷、販売という生産の過程から言っても、あるいは読者という受容の面から言っても、演劇と説教とは案外と近い存在だったといえるだろう。本研究は、書誌学や批評理論の知識を運用しながら、演劇と宗教言説を横断する言葉の連想を文献学的に解明することによって、シェイクスピアの台詞をより正確に理解し、聖俗が交錯するエリザベス朝・ジェームズ朝の演劇文化に光をあてることができると考えた。

2. 研究の目的

(1) 21世紀のシェイクスピア研究における「宗教への回帰」というスローガンの下で宗教の持つ重要性は広く認識されてきた。しかしながら、そうした掛け声は(文化唯物論の批評がそうであったように)マニフェストを声高に唱える運動のようなものであり、ある特定のシェイクスピア作品と個別の説教との関係性はまだ解明されていないことばかりである。本研究は、新歴史主義や文化唯物論のようなイデオロギーに原動力を求める研究ではなく、具体的なテキストの読みと解釈を基盤とした地道な文献学的な立場から、シェイクスピア演劇への理解を深める目的を有している。

(2) シェイクスピア演劇を正確に理解するためには、従来の学術的な注釈書が十分な説明の注を付けていない、難解な箇所を精密に読み解く必要がある。本研究は当時の聖書、説教とシェイクスピア演劇との相互言及の関係性(即ちインターテキスト)を細かに追求することによって、これまで解釈が不十分であった難解な箇所に新解釈(あるいは定説を修正する代替の解釈)を発見しようと試みた。それを契機として、シェイクスピアを中心とする演劇文化と宗教言説とを接続するエリザベス朝・ジェームズ朝の複合的な文化論を発展させることを第二の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 当初はシェイクスピアの本文と当時の説教、祈祷書、聖書のテキストを比較するところから発見の糸口を見つけようと試みた。しかしながら、説教の分析から派生した修辞学への関心に研究の焦点が移り、研究の前半においてはシェイクスピア演劇における修辞学の使用が主要な研究対象となった。これは研究開始当初の予定とはやや異なっているが、具体的なシェイクスピアのテキストの読みを通して重要な発見に至る道を模索するという点においては本研究の趣旨から大きく逸脱するものではない。シェイクスピア時代の修辞学に関する基礎、即ち16世紀当時の修辞学の教育、教本の知識を踏まえた上で幾つかのシェイクスピア演劇を細かく読み直し、『ハムレット』、『ジュリアス・シーザー』、『コリオレイナス』といった作品における修辞学の影響に関して考察を発展させた。対象となった作品は、シェイクスピア作品の中でも大学生を主人公としてアカデミックな世界に光を当てた『ハムレット』、古代ローマ世界の弁論を舞台に取り入れた『ジュリアス・シーザー』等、いずれも修辞学と関連性が深いものである。劇作家シェイクスピアの文筆修行のルーツが故郷ストラットフォード・アポン・エイヴォンの文法学校での修学に端を発することは常識であるが、具体的に当時の修辞学の基礎を踏まえて作品を読み返すという知的作業は、これまであまり真剣に取り組みされてこなかった。本研究の方法は、そうした従来の研究に欠けた側面を補完するものでもある。

(2) 研究の後半においては『あらし』と宮廷説教との関係、あるいは『ヴェニスの商人』と16 - 17世紀の説教との関係に関心を移し、当初の目標であったシェイクスピア演劇と説教との関係性を探究する研究に戻った。ジェームズ朝に活躍した有力な宮廷説教師であるランスロット・アンドルーズの説教を調査する過程で、アンドルーズのイースター説教の一つと宮廷上演が行われた記録があるシェイクスピア作『あらし』との相互言及の可能性を指摘した。説教と演劇が新国王ジェームズ一世の宮廷において交錯し、これまでの研究では重なることがないと思われてきた二つの分野の間で文化的にも重要な交渉が展開したのではないかという仮説を基に研究を進めた。また、『ヴェニスの商人』に関しては、エリザベス朝のピューリタン説教師であったリチャード・ポーターが商人（の為替手形を通じた商取引）を批判した説教とジェームズ朝の説教師ダニエル・プライスが行った冒険商人の対外貿易を礼讃する説教との関係から、時代と文化によって変化する説教と演劇の動的な交渉を考察した。16世紀における都市ロンドンの発展と冒険商人と呼ばれる商人の活動の変遷を視野に入れて『ヴェニスの商人』について考察し、ロンドンの経済的な発展に敏感に反応した説教師の説教を当時のロンドン人がどのように捉えていたのかを想定しながら劇を再解釈した。シェイクスピア演劇と説教とを平行して読むことによって、これまでの研究において看過されてきた両者のインターテキストの関係を発見することができる考えた。

4. 研究成果

(1) 本研究を通して、雑誌論文6件、学会発表3件、図書1件の成果を得ることができた。なかでもとりわけ特筆すべき業績は雑誌論文6本中の3本（以下の雑誌論文の、）がオクスフォード大学出版局から出版されている伝統ある学術誌、Notes & Queries 誌（査読有）に掲載されたことである。N&Q 誌は、これまで当該分野の研究における未知の発見を論文として掲載し、広く世界の学者・図書館関係者・読書子にその新たな見地を公開する学術誌である。シェイクスピア研究の本場であるイギリスやアメリカの学者も含めてこれまでの研究が看過してきた論点を世に問う学術誌に本研究の成果が反映されたことは多大な榮譽である。学会発表では3件中の2件が、それぞれ日本シェイクスピア学会、日本英文学会という全国規模の学会における単独の研究発表である。研究発表を行った教室は、いずれも多数の聴衆を集め、盛況となり、活発な質疑応答が展開した。図書1件は、日本シェイクスピア協会が5年おきに刊行している記念論集（2016年はシェイクスピア没後400年記念論集という画期的な記念号）の共著である。当該の論集には公募で多くの原稿が寄せられ、厳しい選考の結果、残った十数編の論考だけが掲載に至ったのだと後から伝聞で聞いた。書籍は学術論文集ではないために査読付きとは言わないが、実質的には厳密で狭い枠の査読を通過したものである。以上のように、本研究からは国内外の厳正な査読を通過した複数の研究成果が生まれている。以下、これらの業績について、その詳細を記す。

(2) 雑誌論文6本中の3本はNotes & Queries 誌に掲載された。2015年12月に刊行された『ハムレット』に関するノートは、かの有名な‘To be, or not to be’から始まる独白の台詞の締めくくりの部分に現れる難解な句(lose the name of action)について、これまで英米の学術的な注釈本においても指摘されたことのない修辞学の影響を提示したものである。シェイクスピア劇作品の中でも最も有名な独白について、英米の研究者も含む誰もが看過していた論点を発掘し、説得力のある論考を組み立て、国際水準の査読有雑誌に掲載できたのは意義深いことである。2016年9月には『ジュリアス・シーザー』と『コリオレイナス』に関して、修辞学の影響を指摘する論考をNotes & Queries 誌に掲載した。シェイクスピアのローマ史劇におけるこの論考も英米の学術的な注釈本にも載っていない新たな発見である。2018年3月にはシェイクスピア最晩年の単独作『あらし』について、従来の定説を修正する論考をNotes & Queries 誌に掲載した。旧約聖書の詩編75番とプロスペロの名台詞との関係性を英米を含む世界中の研究者の中で初めて指摘したものである。

N&Q 誌に掲載された『ハムレット』に関する論考は雑誌論文の一部と関係している。「行動という名前の病」と題した論文では、最も有名なハムレットの名台詞と称される To be, or not to be から始まる独白の最後の締め括りの文言 and lose the name of action（通例、「行動という名前を失う」と訳される）が、修辞学の基礎への理解が欠けているためにいかに誤読されてきたかを論じた（この「誤解」は英米人の間にも存在するものであり、歴代の本邦の翻訳だけが誤訳を犯していると指摘しているのではない）。シェイクスピア時代の修辞学の知識を踏まえて読めば、その台詞は「（弁論や演劇の）実演において名声を失う」という意味に解釈できることを提唱し、本邦訳の定番である「行動という名前を失う」に学術的な観点から異を唱えた。

(3) 学会発表において特筆すべき業績は、2016年5月の日本英文学会第88回全国大会における「アクションの修辞学 弁論術とシェイクスピア演劇の台詞」と題した個人発表である。本発表は16世紀イギリスの修辞学の受容がシェイクスピア演劇に与えた影響を論じ、これまで看過されてきた翻訳の過程における用語の混乱とシェイクスピアの名台詞の解釈について口頭で発表したものである。発表においては近年のイギリスで俄に起こった修辞学ブームについても

触れ、英文学の真髄に修辞学の伝統が生きていることに言及した。それに併せて、昭和から平成に至る現代を代表する邦訳を見直し、弁論術を考慮に入れた解釈がどのように邦訳に影響を与えたのかを具体的な例文を挙げて検証した。本邦における修辞学への理解の欠如からシェイクスピアの名台詞と称される有名な一節にも誤解があることについては、雑誌論文において「行動という名前の病」という論文で活字にした。

2017年10月の第57回日本シェイクスピア学会(全国大会)においては「『我々の宴』再考『あらし』の宮廷上演と宮廷説教」と題してシェイクスピア最晩年の遺作『あらし』と当時の宮廷説教との関係を論じ、演劇と説教とが同じ時代の同じ空間で交渉し、相互に影響を与えていた可能性を提示した。本発表では、シェイクスピア最晩年の単独作である『あらし』について、その作品の主人公プロスペロの名台詞が同時代の宮廷におけるイースターの説教と関係している可能性を論じた。これまでの研究では、宮廷における演劇の上演と宮廷説教が結びつけて考察されることはあまりなかった。しかしながら、プロスペロの台詞における「溶け落ちる地球(座)」が呼び起こすイメージが、キリストの復活と演劇世界における1613年6月の地球(グローブ)座の焼失事故と連動している可能性を指摘し、演劇・宗教・政治を横断する脱領域的なジェームズ朝の宮廷文化論を試みた。

(4) 図書としては、シェイクスピア没後400年記念論集として公募で原稿が募られた『甦るシェイクスピア』(2016年、研究社)に『ジュリアス・シーザー』における弁論術の背景を探求した論文「隠喩としてのキケロの手」を掲載した。これは『ジュリアス・シーザー』というローマ史劇に脇役として僅かな出番と台詞しか与えられていない雄弁家キケロの影響が作品の表面に現れた以上に重要であることを指摘した斬新な作品論である。史実のキケロはシーザー暗殺に少なからずコミットした、陰謀の鍵を握る人物であると考えられている。プルタルコス(Plutarch)の歴史書『英雄伝』を通して古代ローマの歴史に精通していた劇作家シェイクスピアがこの事実を知らなかったはずはない。しかしながら、シェイクスピアの書いた『ジュリアス・シーザー』においてはキケロの影が薄い。劇の中盤ではキケロの登場はまったくなく、名前すら言及されず、恐らく観客はその存在を途中で忘却する。そこから長い沈黙を経て、劇が終盤に差しかけた四幕三場において、唐突にキケロの訃報が伝えられるだけなのである。驚くべきことに英米の学者も含む従来の批評はこの「不在のキケロ」についてほとんど言及してこなかった。その謎を修辞学の基礎という側面から考察し、「不在のキケロ」の理由を説明したのが本論である。その主旨の一部は、2016年9月のNotes & Queries誌に発表した英文の論考をわかりやすく日本語で説明し、英文学会やシェイクスピア学会の会員だけでなく一般の読書子にも開かれた形で書き下ろしたものである。シェイクスピアの劇作法がエリザベス朝の修辞学や弁論術に基礎を置くものであることを再確認しながら、表面的には『ジュリアス・シーザー』にほとんど登場しないキケロが、実は作品のバックボーンとなる文化的な柱であることを広く世に紹介した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

Manabu Tsuruta, Psalm 75 and Prospero's 'Great Globe' Speech in The Tempest, Notes & Queries, Oxford University Press, 査読有、263:1、2018、pp. 83-84

DOI:10.1093/notesj/gjx219

鶴田 学、エリザベス朝演劇における魂の溶解と輪廻転生説、福岡大学人文論叢、査読無、2018、pp. 995-980

Manabu Tsuruta, Is Action Eloquence?-A Note on the Use of Rhetorical Terms in Coriolanus and Julius Caesar, Notes & Queries, Oxford University Press, 査読有、261:3、2016、pp. 434-435

DOI:10.1093/notesj/gjw146

鶴田 学、行動という名前の病 近代初期英国の修辞学とシェイクスピアの名台詞、福岡大学研究推進部論集、査読無、2016、pp. 43-53

鶴田 学、ハムレットと聖ポール寺院の庭 記憶を巡る父子の物語、福岡大学人文論叢、47:4、査読無、2015、pp. 1161-1177

Manabu Tsuruta, Hamlet's 'Name of Action' -A Ciceronian Legacy?, Notes & Queries, Oxford University Press, 査読有、260:4、2015、pp. 559-560

DOI:10.1093/notesj/gjv181

〔学会発表〕(計3件)

鶴田 学、『ヴェニスの商人』再考 同時代の視点から、九州シェイクスピア研究会、(九州大学 西新プラザ) 2019

鶴田 学、「我々の宴」再考 『あらし』の宮廷上演と宮廷説教、日本シェイクスピア学会、(近畿大学) 2017

鶴田 学、アクションの修辞学 弁論術とシェイクスピア演劇の台詞、日本英文学会、(京都大学) 2016

〔図書〕(計 1 件)

鶴田 学 他、研究社、甦るシェイクスピア、2016、11

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。